

アイヌ民族の「お守り」と生き物たち

アイヌ民族は山菜採取を中心に、狩猟や漁労を行いながら、食材の不足分は若干の農耕で補っていました。食材の全ては自然界の余剰分を活用していたのです。このような全面的に自然に依存する生活は常に危険を伴った



佐賀 彩美 (さが あやみ)

一般社団法人北海道開発技術センター
調査研究部研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレー国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モントレー校)通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

り、天候にも左右されやすかったため、アイヌの人々は様々な神祭りをすることで自分や家族の安全無事を願っていました。その過程で、神から啓示を受けたり、或いは、狩猟で毛色が異色の動物を得たり、動物が体内に飲み込んだ異物などを見つけると、それらを神からの授かりものとして、お守り(護符、守り神)にしました。

一般的に言えば、お守り(同上)のかたちはイナウ(イナウは鳥となって関係する神へ人間の願いを届ける伝令者とも考えられていました)が代表的ですが、その他にも、動物の頭蓋骨であったり、昆虫や石など多種多様なものがお守りとして祀られていました。こうもりのミイラを祀っていた事例も知られています。

では、そもそもなぜ動物がお守りになるのでしょうか。その訳は、生命についてのアイヌ民族独特の考え方と深い関わりがあります。一般的には、人間が生き物を殺すのは可愛そう、自然死が望ましいと考えますが、アイヌの人々の考えでは、狩猟の獲物は神が進んで自らを人間に与えるのです。なぜなら人間が、「授けられた」獲物=カムイに感謝の言葉を述べ、供物や酒を供えて丁寧に祀ることでカムイ達は人からの「感謝」というお墨付きをもらい、それによって神としての位が上がるだけでなく、天界(神の国)に戻っても、この世への生まれ変わりの速度が早まるというように、カムイにとって良いことづくめなのです。これは、アイヌの精神世界の基本である「生命の往還」という思想にも一致しています。さらに、カムイ達は、丁寧に扱ってくれた人間を一層守

護し、多大な恩恵をもたらすとされるため、人間はその分、盛大な神祀りをしなければならないのです。

次に紹介するお話は、^{ひぐま}熊を仕留めたアイヌのハンターに起こった実話です。人間が授かったカムイの扱いを誤っ

たために、災いを招いたというもので、同様の伝承は数多く残されています。このハンターは4本ある熊の手を仲間達と分けました。熊の手はとても美味しいようで、珍重されますが、アイヌの人々は熊の手をいただいても、骨はばらばらにせず、その形のままして送りの儀式をします。ところが、和人にあげた1本の取扱いが悪かったようで、このハンターの末娘が高熱を出して寝込んでしまいました。果てはむっくりと起き上がり「手を返せ」と叫ぶようになりました。問題の熊の手の骨を取り戻すには、時すでに遅く、仕方がないので、父親は骨の代わりに熊の手を木で彫り、熊の神に事の次第を説明しお詫びしたところ、娘の病気はあつと言う間に治ったそうです。信じられないような本当のお話です。熊は神々のなかでも重視される神であり、恐らくは数千年に亘り自らを人間に授け、送られるという関係が続いてきたはずで、熊は非常に知能が高いともいわれており、このお話のようなことも起こりうるという気もします。長い時間をかけてアイヌの人々が熊の生態を観察する中で培われた相互利害の関係がその理由かもしれません。また、そうした思想が社会システムに組み込まれ、結果的に熊の頭数管理の役割も果たしていましたが、魂送りの儀式の伴った熊狩も絶えた今、熊を甘く見た結果として、嘗てアイヌの人々がウエンカムイ(ウエン wen-悪い カムイ kamuy-神)と呼称した、人間に害を及ぼす熊も増えていますのでどうぞご注意ください。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する傍ら、國學院大學北海道短期大学部(滝川市)で開催のペカンベ祭で伝統料理を提供している。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『知里真志保フィールドノート(6),(7)』(北海道教育委員会、2007、2008年)、『平成20~令和3年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~12』(北海道教育委員会、2008~2021年)等。